ISPN2024 Toronto 参加報告

松戸市立総合医療センター　小児脳神経外科
佐々木みなみ

2024 年 10 月 13-17 日にカナダ・トロントで開催された、 The 50th Annual Meeting of the International Society for Pediatric Neurosurgery（ISPN 2024）に参加させていただきましたので、ご報告いたします。

学会の様子

ISPN 2024 は第 50 回という節目の会となり、これまで世界のトップを席巻してきた Hospital for Sick Children（Sick Kids）の James M. Drake 先生と Abhaya V. Kulkarni 先生によって主催されました。

10 月のトロントは、気温平均 5-10 度とダウンコートが恋しくなる気候でしたが、天候に恵まれ、山々や穏やかな Ontario 湖に映える美しい紅葉が目に入り、日々の忙しさで忘れがちになっていた季節の移り替わりを感じることができました。（Fig. 1-3）街中は Thanks Giving Day（10 月 14 日）から Halloween の飾りつけにかわり、街全体がオレンジに染まって、寒いカナダにあっても、暖かな印象を受けました。

今回は excursion などのイベントはなく、14〜16 日の 3 日間ぎっしりと Scientific Program の日程が詰められ、全体の会の前後に当たる 13 日・17 日に教育セミナーやハンズオンセミナーが開催されるという形式でした。今年度は残念ながら脳神経外科総会と日程が重なってしまい、例年より日本から参加された先生方は少ないようでしたが、かつて Sick Kids で研修や留学を経験された先生方をはじめ、15 人ほどの先生方がトロントの地に会し積極的なディスカッションや交流をなさっていました。

たくさんのセッションがありましたが、なかでも印象的だったのは、Medulloblastoma に関する Michael Tayler 先生のご発表です。人間の脳がなぜこんなにも大きいのかといった進化や発生学の内容から、Medulloblastoma の遺伝学的背景と発生起源に関することなど、ご自身のこれまでの研究成果を壮大なストーリーとして語っておられ、引き込まれました。また、学会全体として機能的脳神経外科に関する話題が多く、少しその方面に疎い私にはすべてを理解することはできませんでしたが、AI や最新デバイスなどの新規技術を用いた治療は非常に興味深く、この分野に大きな将来性があることを感じさせられました。

今回は 50 回の記念回だったため、これまでの歴代の会長の写真や Video message が流され、ベテランの先生方は頬を緩ませながら見ておられました。ISPN の歴史に触れ、世界中のたくさんの小児脳神経外科医が悩みながら積み重ねてきた知見に敬意を抱くとともに、私もその礎の上に立っている者として恥ずかしくない診療をしなくてはいけないと感じました。

発表を通じて感じたこと

ISPN において日本は Active member が多い国とのことでしたが、今回は総会と日程が重なってしまったこともあり演題はやや少なく、また発表の多くは Poster で、Oral session に採択されたものが少なかったという話を聞いて、少し残念に思いました。参加されていた日本の先生から、研究内容や発表内容の n 数が少ないとの指摘があり、再度発表内容を見てみると頷けました。欧米やアジアからの発表の n 数は 3 桁〜4 桁、一方で日本の発表は 1 桁〜2 桁が多く、確かに世界を驚かせたり、納得させたりするには少し物足りないかな、と感じました。日本の小児脳神経外科医療は、都心と地方の格差が小さく、どこでも標準的な治療を受けられる非常にいい環境を提供していることを誇りに思う一方で、世界の多くの国・地域で行われているセンター化、つまり、患者も医療従事者も High Volume Center に集約して効率的な治療や研究、教育がなされていることは少し羨ましくも思います。治療を受ける患者さんや家族の目線からすると、住んでいる地域で治療を受けられることは大きなメリットですが、日本の治療を世界に発信する、世界標準の治療ができる医師を育てる、という点においては少し難しさがあるかもしれません。今回の会期中も日本の先生方が、集まるたびに「一緒にやりましょう」と語りあっていた姿を見て、国内での治療の標準化や疾患に応じた集約化を行い、All Japan で世界と対峙していく必要性も感じました。きっとこのことは、2025 年の JSPN のタイトルにもなっている、『責任ある均てん化』を目指しながら、日本の医療を世界への発信する、という 2 つのことを実践しなければならず、ますます『和をもって小児脳神経外科を成す』必要があると感じました。

私の経験と学会参加のススメ

私にとって ISPN の参加は、2017 年 Denver、2020 年 Birmingham に続いて 3 回目でしたが、初めて参加した 2017 年の Denver は脳神経外科医になることを決めた思い出の学会でもあります。当時初期研修医 2 年目で、「国際学会を見てみたい」という興味だけで、半ばアメリカ旅行の感覚で気楽に参加したものでした。実際に各国の小児脳神経外科医がこどもたちの将来を思って、熱く議論する姿を目の当たりにして、純粋にカッコいいと感じ、この学会の参加中に脳神経外科医になることを決意し、帰国後すぐに入局の手続きをしたことを懐かしく思い出します。あれから 7 年経った今、熱く議論する側に回った、とはいいがたい現状ではありますが、会を構成する一員になれたことはうれしく感じています。

学会発表、ましてや国際学会での発表は私たち若手にとって、とてもハードルが高いです。忙しい日常診療や研究の合間で、不慣れな英語での抄録やスライド作成、煩雑な各種手続きを行うことは、かなりの時間と労力を要しますし、円安の流れを受けて費用の面でも追い打ちをかけられました。しかし、私が今回の ISPN に参加しようと思えた、あるいは次回も参加しようと思う理由は、希少な疾患が多いこのフィールドにおいて、世界中の

先生方の経験を共有する意義深さを実感できるから、そしてこの会が素敵な出会いにあふれているからだと思っています。

普段はお話しする機会が持てないような、日本の、あるいは世界のトップを走る臨床医や研究者に直接会って話ができたことは非常に尊い経験となりました。今回私は、他施設の先生と食事を共にする機会にも恵まれ、現在の私自身が悩んでいる症例のことや今後の自身のキャリア展望について、たくさんのアドバイスをいただくことができました。また、様々な国の様々な医療事情の中で、システムや考え方・文化の違いがあっても、同じくこどもの健やかな成長や発達を願って、最良の医療を考えている世界中の先生方と同じ空間に集えたこと、また自身がその一員となれたことも非常に充足感のあるものでした。

今回私が感じた学会参加の意義を誰かに、できれば同じ世代やもっと若い先生方へ、伝えたいという思いで、この原稿を書かせていただきました。日本の小児脳神経外科がますます活発なものとなるために、あるいは、世界で活躍できる人材を育てていくために、諸先輩方のお力もお借りしながら、若手も頑張らないと、と考えています。

来年度も恥ずかしくない業績を携えて参加するために、明日からまた頑張ろうと思わせていただいた 5 日間でした。現地でお世話になった先生方に改めて感謝申し上げます。そして、来年の ISPN2025 Lyon でもたくさんの先生方にお会いできることを楽しみにしております。

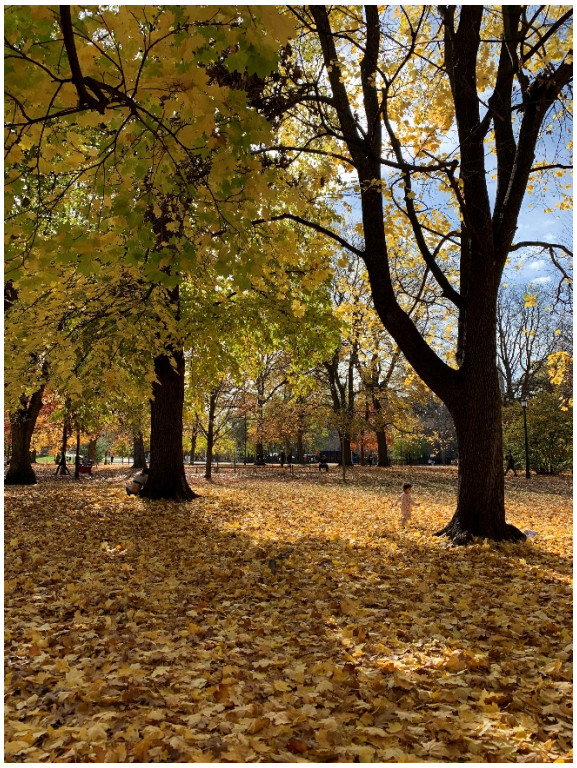

Fig. 1　トロントの紅葉風景、近くの公園で

Fig. 2 トロント市庁街のモニュメント

Fig. 3 会場（The Westin Harbour Castle, Toronto）と会場 30 階から望む Ontario 湖

Fig. 4　Welcome Reception で先生方と
（左から赤井先生、佐々木、三輪先生、五味先生、下地先生、鶴淵先生）

Fig. 5　夜の交流会　東海岸でとれた牡蠣を楽しんだ
（左から小山先生、佐々木、石田先生、長坂先生）

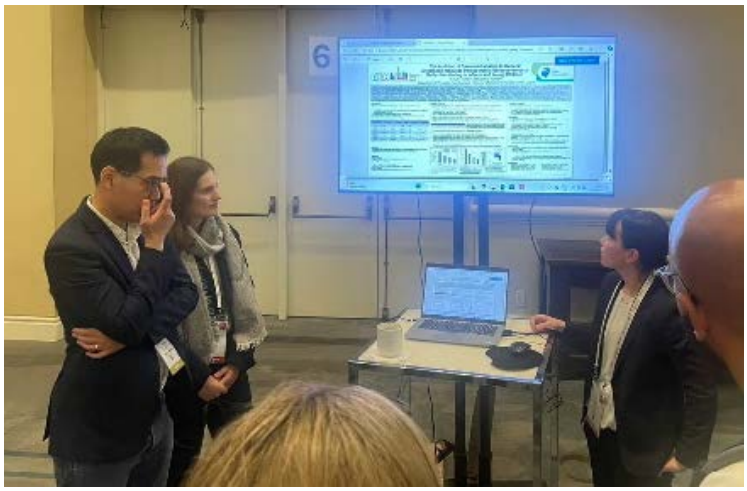

Fig. 6　e-poster 発表の様子
座長は Sick Kids で一緒に研修したスイスの Dr. Greuter